人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	その他指導内容や指導方法において特徴ある工夫が行われている実践事例

１．基本情報

〇都道府県名及び市町村名

三重県伊賀市

〇学校名

三重県立あけぼの学園高等学校

〇学校のＵＲＬ

http://www.mie-c.ed.jp/hakebo/

２．学校紹介

〇学級数

１学年３学級、２・３学年各２学級　　合計７学級

〇児童生徒数

【全生徒数】２２３人（平成２５年１０月３０日現在）
（内訳：１年生 80 人、２年生 74 人、３年生 68 人）

〇学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【校訓】強く 明るく 真心で
【Ｓ．Ｉ．（スクールアイデンティティ）】自分を大事に、自信を持って、自分の明日をつくろう
【目指す学校像】生徒一人ひとりが、あけぼの学園高等学校の生徒として「自信と誇り」を持ち、地域に貢献し地域から信頼される学校をめざす。

〇人権教育にかかる取組の全体概要

【育みたい力】
・広い視野を持ち、科学的に考えられる力（ものの見方）
・適切なコミュニケーションがとれる力（スキル）
・すすんで社会と関わっていける力（態度）
【どのような取り組みが必要か】
・全教職員が各分掌、教科でのスキルアップを目指す
・授業をはじめとした学校生活を大切にする
・信頼関係を築く
・人権学習の充実を図る
・家庭・地域等との連携をすすめる
・教育相談体制の充実を図る

３．特色ある実践事例の内容

【取組の目的・内容】

本校には、目的をしっかり持って学校に来ている生徒がいる反面、様々なつまずき体験から自信を持てずに過ごす生徒も少なからずいる。このため、本校では、基礎学力・基本的生活習慣・コミュニケーション能力の向上を図り、生徒一人一人が達成感や自信を得られるよう組織的な授業改善を進めている。（→ア）

また、卒業後、進路先で活躍している姿が見られる一方で、やりがいや居場所を見いだせず、早期の離職・退学を経験する者もいる。そこで、卒業を見据えた、より良い教育実践を目指すべく、進路先での成功要因や、つまずいてしまう要因を明らかにするための追跡調査を実施した。（→イ）

ア　教職員の力量を高める授業改善の取組

学校全体の調査研究の柱は、「生徒の実態に即した授業改善を目指し、『なかみ』の指導にチャレンジする」こととしている。経験年数の短い教職員の多い本校においては、授業改善を行うに当たり、教職員一人一人のスキルアップは必要不可欠なものである。そこで、教職員がその持ち味を生かした授業づくりを目指し、大学の研究者を招き、専門家の視点から客観的なアドバイスを頂くことで、生徒一人一人が自信を持って授業に取り組むことができるようにしている。また、様々な不安を抱く生徒を中心に据え、すべての生徒の学力・進路保障を進めている。

イ　多様な主体と連携する人権・同和教育推進協議会の取組

本校では、地域との連携を推進する中で、外部の意見を反映することによる人権教育の充実・活性化を目指し、ＰＴＡ役員、保護者ＯＧ・ＯＢ、卒業生、学校関係者評価委員を招いた「人権・同和教育推進協議会（かけはしの会）」を定期的に行っている。今後、実施の意義と方法を更に見直しながら、より一層意義深い協議会へと再構築していく必要がある。

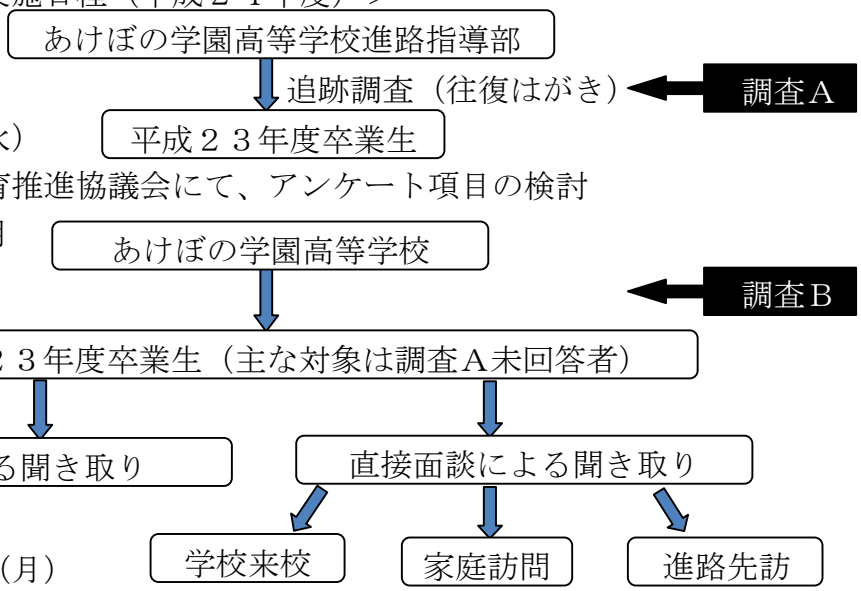
具体的には次の通りである。

○近隣の小学校（２校）、中学校（１校）から代表の教職員に参加してもらい、協議を通してそれぞれの取組について理解を深め、小・中・高の一貫性のある人権教育を目指す。

○卒業生には、進路先で活躍している姿が見られる一方で、やりがいや居場所を見いだせず思い悩んだり、中には早期の離職・退学を経験したりする姿も少なからず見られる。そこで、学校や地域の中で、生徒の卒業後の姿を見据え、より良い教育実践を目指すべく、進路先で成功する秘訣や、つまずいてしまう要因を明らかにし、地域で活躍する人材育成の在り方を探るため、卒業生追跡調査を実施することとした。

＜卒業生追跡調査　実施日程（平成２４年度）＞

１．６月～７月



２．７月２４日（火）

第１回人権教育推進協議会にて、アンケート項目の検討

３．７月下旬～８月

４．１２月１９日（月）

第２回人権教育推進協議会（かけはしの会）にて、集計結果について協議

５．１２月中旬～

集計結果を全教職員で共有し、ＨＲや保護者面談の機会に活用

４．実践事例の実績、実施による効果

ア　教職員の力量や意識の向上

研究授業後の研修会では、ちょっとした心掛けで話の聞きやすさ、活動への入りやすさを改善できることや、「学び合い」の授業スタイルを基盤とし、さらに「高め合い」の授業づくりを目指すという視点で助言を頂いた。また、かつて本校の生徒を中学校で指導されていた方から、「中学校ではほとんど顔すら上げなかった子が、今は生き生きしている。あけぼの学園高校で大切にしてもらっているのだと感じた」といった感想も頂き、教職員全体の大きな励みとなった。

生徒の中には、極めて厳しい家庭環境に置かれ、学校が唯一の居場所になっている者もいる。そのような生徒は、達成感や成就感を感じた経験が乏しく、当初は授業に意欲的に参加できない状況もあったが、教職員が積極的に声をかけたり、発言を促したりするなどの継続的な取組の結果、生徒と教職員の相互理解や信頼関係が芽生え、安心して自分の考えを伝えたり、互いの考えを受け止め合える学級集団に変わってきた。また、間違いを恐れず挑戦する姿も見られるようになった。

教職員・生徒が共に「頑張ればここまでできる」と思えた経験は双方の「自信」につながり、その後の授業にもプラスの影響を及ぼしている。その「学び」や「変化」について校内だよりを通して発信することで、教職員全体への刺激にもつながった。

◆授業改善に参加して学んだこと　～若手教職員の声から～

Ａさん：自分の強みや課題を明確にすることができました。特に嬉しかったのは、「良いところを更に伸ばしながら、課題を克服する」という視点でアドバイスをいただけたことです。ある生徒は、「授業が嫌いやったけど、先生がちゃ

んと私の発言を受け止めてくれる人やと分かってから、だんだん楽しく思えるようになった。」と話してくれました。一人一人を大切にするという視点が、授業を始め、あらゆる場面に生きてくると実感した瞬間でした。

Ｂさん：小さな心掛け一つで授業が変わることを学びました。また、御意見をいただけたことで、自らの課題を明確化することもできました。今後は、「グループワークの導入」、「生徒の『できている部分』に注目するようにする」といったことに重点を置き、授業改善を続けていきたいと思います。

Ｃさん：生徒の雰囲気や発言に対する受け答えなど、普段から気を付けていたことを評価していただけてよかったです。今後も、「学び合い」の中では、互いに分からないところを補い合うだけでなく、「高め合い」ができるように工夫を重ねていきます。また、生徒に話す際の視線や指示について、大学の研究者からビデオ映像とともに御助言いただき、自分の授業を改めて振り返る良い機会となりました。

イ　多様な主体との連携の深化

追跡調査のアンケート項目について、人権・同和教育推進協議会（かけはしの会）では、「困ったことが起こったとき、解決できているか」、「社会の中で人権が大切にされているか」を卒業生から重点的に聞くことが確認された。

調査Ａからは、卒業生の前向きな姿が見られたが、困っている卒業生の姿はなかなか見えてこなかった。このことについて、協議会では、「はがきを投函できるのは、安定しているからこそであり、そうでない卒業生はそれどころではない状況があるのではないか」と考えた。

そこで、調査Ｂでは、調査Ａで報告のなかった卒業生に直接聞き取りを行い、実態の把握を試みた。その結果、就職者について、「先輩や同僚との人間関係は比較的良好であるが、困ったときに自分の気持ちをうまく伝えられず悩んでいることが多い」や、「現在の仕事内容について満足度が低い」ということが分かってきた。また、そのような中、本校での仲間とのつながりで、悩みを解消した卒業生もいることが分かった。

このように、卒業後の状況を把握することから生徒の様々な課題が見えてきており、今後学校として取り組むべき方向性を確認することができた。

５．実践事例についての評価

生徒に必要な力を身につけさせるため、学校全体で授業改善に継続的に取り組むことを中心として、学校の教育活動全体を通じた人権教育の推進を図っている。

また、家庭・地域、関係機関との連携や校種間連携を図る「人権・同和教育推進協議会（かけはしの会）」を定期的に開催し、生徒の姿を中心とした協議や卒業生の追跡調査による実態把握などを通じて人権教育の活性化に取り組んでいる。

今後は、授業改善の達成度の基準づくりや人権教育カリキュラムを生かした授業実践などに取り組むとともに、かけはしの会からの取組提言などを契機として、人権尊重の学校づくりをさらに進めていく予定である。

2013年度　あけぼの学園高等学校　人権教育カリキュラム

◎スクールアイデンティティ
「自分を大事に、自信を持って、自分の明日を作ろう」
◎育てたい力（「人権・同和教育推進計画」より）
1．広い視野を持ち、科学的に考えられる力（ものの見方）
2．適切なコミュニケーションがとれる力（スキル）
3．すすんで社会と関わっていける力（態度）

		高めたい分野		
		仲間・集団づくり（コミュニケーション）	課題解決（個別的な人権問題）	自己実現（学力・進路保障）
1学年目標		コミュニケーション能力を高める学習を系統的に行う。	いじめや差別を許さない仲間づくりをすすめる。	授業に集中する態度を身につけさせ、基礎学力を定着させる。
2学年目標		「総合研究Ⅰ」の中でコミュニケーション能力を高める学習を系統的に行う。	いじめや差別を許さない仲間づくりをすすめる。 修学旅行でのアイヌ文化学習を通し、多文化共生の視点を身につける。	ガイダンス面談を通して、本人の意見や希望を聞き、進路実現に向けアドバイスを行う。
3学年目標		自分自身や、1人ひとりの違いを認め、人間関係を円滑にする力をつける。	いじめや差別を許さない仲間づくりをすすめる。	面談、面接指導、履歴書指導を充実させ、個に応じた進路指導を行う。
教科目標	国　語	思考力・判断力・表現力を育み、伝え合う力を高めるとともに、心情を豊かにする。		
	地歴・公民	不合理な差別や人権侵害などについて、歴史や政策などの点から学び、社会の一員としての自己の役割について考えさせる。		
	数　学	1人ひとりに理解できた時の喜びを体験することによって、学習意欲を引き出し、基礎学力の定着を図る。		
	理　科	学力保障の観点から、日々の授業を大切にするよう、評価方法を定期的に再考し、1人ひとりが学習の成果を実感できるようにする。		
	保健体育	グループ活動などを通じて運動の楽しさや喜び味わい、生徒が1人ひとりの役割や責任感を自覚しながら学習できるようにする。		
	外国語	多様な活動や教材を通して異文化への理解・関心を高めるとともに、言語活動（読む、聞く、書く、話す）に対する積極的な姿勢を養う。		
	家　庭	生きる力を身につけることを目標とし、実習等で協力して作業に取り組む中で、家庭生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を養う。		
	情報・商業	コンピュータの危険な側面・問題点を理解し、情報社会に主体的に参加する態度を養う。		
	産業社会と人間	自分を見つめ、自己の将来をイメージすることを通じて自己実現を図り、自己肯定感を高める。		
	福　祉	介護技術を通して、1人ひとりの自己覚知を行い、人を思いやる心を育成する。		
	総合研究	教科横断的内容を講演形式やグループ活動で学ぶことを通じ、自己の在り方や生き方を考え、他者への理解を深め社会人として広い見地を持つ。		
分掌目標	教務部	希望の進路に合わせた学習が展開できるよう、科目設定の検討や科目選択ガイダンスを実施する。		
	生徒指導部	いじめ・暴力をなくし、生徒1人ひとりが安心して学習できる、安全な学校にする。		
	進路指導部	あらゆる場と機会をとらえ、人間としての生き方を真剣に考えさせ、キャリア教育等と連動させ、積極的に人権教育に取り組む。		
	保健部	生徒1人ひとりが、自己肯定感をもてるような関わりをしていく。		
取組内容	教科・分掌	◇全体に関わって ・登校指導や校内巡視を毎日行い、生徒の動向に注意を払う。【生徒指導部】 ・基本的人権の保障、自由に生きる権利、平等に生きる権利等について、理解を深める。【地歴・公民】 ・日常的に１人ひとりへの声掛けを大切にし、自己肯定感の向上につなげる。【家庭】 ・人生と家族・福祉、高齢者の生活と福祉等について理解を深める。【家庭】 ・情報化社会の進展が私たちの生活に与える影響について理解を深める。【情報・商業】 ・環境、国際理解、健康、自己理解、キャリア教育などの講演やグループ学習を実施する。【総合研究】 ◇コミュニケーション能力向上に関わって ・インターンシップ（職業体験）の感想をもとに、身近な人権課題に関わる問題に気づき、望ましい人との関わり方を考えさせる。【進路指導部】 ・文章を朗読することで、他者とのコミュニケーションのあり方について理解する。【国語】 ・情報モラルは、誰もが守るべき常識的なマナーとルールであることを理解させる。【情報・商業】 ・SNSは、一歩間違うと個人を傷つけたり、個人情報を漏洩させてしまうことを理解させる。【情報・商業】 ◇課題解決能力向上に関わって ・統一応募用紙の取組と出会い、自分の進路も含めた生き方と結び付け、就職差別をなくす生き方を考えさせる。【進路指導部】 ・個別面談や教育相談の機会を大切にするなど、生徒が悩みや思いを話せる環境を整える。【保健部】 ◇自己実現能力向上に関わって ・問題の難易度のステップを細かく設定し、段階を踏んで理解させる。【数学】 ・習熟度別クラスでのきめ細かい学習指導を展開することが可能かどうか検討し、実現させる。【理科】 ・少人数制クラスや習熟度別クラスを編成し、個に応じたきめ細かい学習指導を展開する。【外国語】 ・入学後にアンケートを実施し、生徒の学習状況を踏まえた上で教科指導を行う。【外国語】 ・働くことの意義や重要性について理解を深める。【保健体育】 ・生きていくこと、働いていくことについて将来展望を持つために、「自分史」を作成する。【産業社会と人間】		
	人権学習 （個別の人権課題）	◇1学年 （前期１）自分のことを話し、相手の言葉を受け止めるコミュニケーション活動 （前期２）自分史作成等の活動【部落問題】 （後　期）自己肯定感を高めるコミュニケーション活動 ◇２学年 （前　期）松浦武四郎記念館訪問を通したアイヌ文化学習【様々な人権問題】 （後期１）名刺交換ゲームを用いたコミュニケーション活動 （後期２）統一応募用紙の変遷と背景について【部落問題】 ◇３学年 （前　期）面接時の不適切質問について【部落問題】 （後　期）結婚について【部落問題】		
	教職員研修	◇前期 ・4月：生徒の現状や思いについての情報共有を行い、本校の人権・同和教育の方針を確認する。 ・5月：クラス内におけるつながりの深め方や、いじめ等の問題の解決方法を考えさせる手法について、具体的な方法論を学ぶ。 ・6月：生徒の学ぶ意欲や関心および自信を高めるための授業改善研究を行う。 ・7月：教職員アンケートから見えてきたものをもとに、生徒との関わりや日常生活を照らし合わせながら人権・同和教育の推進方法を学ぶ。 ・8月：教育集会所を訪問し、地域の部落問題と向き合ってきた歴史や、学校と地域の関わりについて学ぶ。 ◇後期 ・10～11月：生徒の学ぶ意欲や関心および自信を高めるための授業改善研究を行う。 ・11月　　：前期の人権・同和教育の推進体制について検証し、今後の推進体制について検討する。 ・1～2月　：生徒の学ぶ意欲や関心および自信を高めるための授業改善研究を行う。 ◇人同推だより ・研修をさらに深めるため、人同推だよりを定期的に発行する。		

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

三重県立あけぼの学園高等学校
「第三次とりまとめ」の「全体計画」の作成を更に進めて、「人権教育カリキュラム」の開発と実施が行われている事例である。カリキュラム開発のために、往復はがき、電話による聞き取り、直接面談による聞き取りの方法を使い、卒業生の追跡調査をしている。主たるねらいは「地域で活躍する人材」の育成であるため、高等学校キャリア教育と人権教育の融合型のカリキュラムである。「第三次とりまとめ」の「自分の大切さ」を認めることができるという内容が、学校の目標としての「スクールアイデンティティ」に生かされている。また、「課題解決(個別的な人権問題)」がカリキュラムの全体を貫いており、「いじめ」の問題の予防的なカリキュラムとなっている。本事例は、キャリア教育や「いじめ」予防などとの関係を考慮しながら「人権教育カリキュラム」を開発する際に参考になる。